

## 訪問介護員養成研修会（2級）について

入江 三弥子\*

### I はじめに

農業就業人口は、平成 22（2010）年には 261 万人となり、平成 12（2000）年と比べ 33%、平成 17（2005）年と比べ 22%減少している。また、平成 22（2010）年における農業就業人口については、その平均年齢は 65.8 歳になるとともに、割合を年齢区分すると 65 歳以上が 60%、75 歳以上が 30% になるなど、高齢化が進行している。

「農業構造の展望」によれば、農業就業人口のうち基幹的農業従事者数は、平成 21（2009）年の 191 万人から、平成 32（2020）年には 145 万人とさらに大きく減少し、そのうち 65 歳以上は 94 万人（全体の 65%）になると見込まれている。現在、高齢農業者は、多くの地域で農業生産や地域維持のため、主体となって活躍している。例えば、高齢者グループが全国各地で活動しており、活動内容としては、生産・加工販売、伝統文化・技術の伝承または交流等が多くなっているが、なかには、他産業との連携や都市住民との交流、農園の運営といった地域の課題を解決しようとする活動等、今後の高齢農業者に期待することは多くなっている。しかし、他方農村においても介護が必要な高齢者も増加しており、農村での介護者の養成も急務である。家族農業が主体の地域では老老介護が当たり前となっており、若者の定住が望まれている。

また、農作業を行っている人は、行っていない人に比べて、「糖尿病、高脂血症等、生活習慣病の危険因子の保有率が低い」、「運動機能、精神的状態は比較的良好」等の傾向があり、都会と比較すると元気な高齢者がまだ活躍している社会でもある。しかし更に進めるためにも農村の高齢者が生涯現役でいきいきと農村社会で活躍できるような、環境整備が

必要である。一般的に高齢者は高齢化とともに心身状態が多様化重症化、長期化することが予想されている。これを踏まえ、農村社会の人材養成を担っている鯉淵学園農業栄養専門学校として訪問介護員の養成研修事業を実施し、農業を学ぶだけでなく、農村社会の構成員として中核的な担い手の教育養成の一環として介護支援者の研修を行うこととした。

日常の農作業が疾病予防に有益に作用し、高齢農業者自身の健康維持にも役立っている可能性があるとの研究報告もあるが、いつ体調の変化を来すかもしれない恐れも有り、快適な農村生活を送ってもらうためにも、これからの若者が必要な知識技術として訪問介護員資格を考えた。高齢者の活動を今後とも支援していく体制の担い手になってほしいと期待している。

### II 研修内容

研修期間は平成 23 年 6 月～平成 23 年 8 月とし実習は年度内に終了した。研修カリキュラムは 130 時間に及び、実習施設として笠間市の宍戸苑・笠間市の社会福祉協議会の協力を得て研修生 10 人の養成を行った。

2011 年度は東日本大震災が起これ、この資格取得の大切さも改めて認識した。訪問介護員（2 級課程）養成研修で学んだこととして学生たちが挙げていたことは、以下のものであった。

- ・体位・姿勢変換を実際にやり、方法を学べた。（手前に寄せる・横に向ける・頭の方に移動する・ベッドの端に座る等）腕だけ（力だけ）でやると腰を痛めるため、全身でやるのが大切だと分かった。また、褥瘡は早期発見が大切で予防も重要である。
- ・車いすに実際に乗ってみて、段差などで持ち上げられた時は思っていた以上に怖いと感じたので

\*鯉淵学園農業栄養専門学校 食品栄養科

- 車いすでの移動では注意が必要。車いすの種類によっても扱い方が違っていた。
- ・ 肢体不自由の体験では、普段の動きと全然違って、動きにくく、視界が狭くなっている。そのためにも細かく周囲の様子を伝えることが大切であった。
- ・ 食事の介護では、誤嚥をしないように注意することが一番のポイントであった。そのために座る姿勢や、椅子やテーブルの高さを合わせるが必要であった。また、ベッドで食事をする場合、全介助では30～45°の角度にしたときに飲み込みがしやすかった。また、片麻痺の方の自力食事の場合、自助具を使用し、特に皿の角度などの注意が必要であった。
- ・ 寝たきりになると、皮膚の病気を起こしたり、不快感を与えたりすることを理解した。気持ちの部分での配慮としてスムーズに行うことも大切だった。
- ・ 着脱の基本は「脱健着患」で、健側（自由が利く方）から脱ぎ、患側（不自由な方）から着る。健側は自立支援の観点からできることは自分でしてもらうが、患側はなるべく動かさない。羞恥心に配慮して行うことと体調の変化なども注意が必要。衣服のしわは褥瘡の原因にもなる。また、感染症や皮膚疾患の早期発見ができる場でもある。清潔を保つことが疾患の予防となる他にも、心身の健康を保つことに大きく関わっていた。
- ・ 高熱が出た場合、脇は両方を冷やさないようにする。
- ・ 記録を取ることを目的で大事なことは、情報を共有し、行ったケアを点検し、技術を高めることである。良い記録を書くためには、書き慣れることとわかりやすく書く、他の人が書いた記録をたくさん読む、その日の内に書くことが大切である。家族の方も見るものであるから、分かりやすく、詳しく書くことが必要である。
- ・ レクリエーションは、スポーツやクラフト、趣味や旅行など、多種多様なことであり、日常の中から楽しみや気分転換となるものであった。高齢者では身体状況により出来ないこともあるが、残存機能を使ってある程度アレンジすることで対応していくことが必要であった。基本は、利用者様が楽しめるようにレクリエーションを援助することである。
- ・ 今までの暮らしや楽しみなどを聞くことができ接しやすくなった。食事の介護では、食べるペースがそれぞれ違って、早く食べすぎてしまう方、途中で手が止まってしまう方などに声かけをした。
- ・ 自己紹介をし、身近なことから会話を広げていくと話がしやすいということを学ん
- ・ 在宅サービスを行い、人とのコミュニケーションの大切さを感じた。信頼関係が生まれるとサービスもしやすくなると感じた。また、信頼関係の中でも「高齢者の方が出来ることは自分でやらう」ということも大切であると学んだ。すべて介助すればよいではなかった。
- ・ 訪問介護では、時間内にやるべき事をするために順番や手順を工夫して行っていた。例えば、食事は何をするか、何を買ってくるか、清拭の時刻ゆい所がないか等、意志や希望を確かめながら進めた。買い物はリストを渡されたが、事前に冷蔵庫の等の食材を確認し、量も多すぎないように考えて買った。

### Ⅲ 反省したこと

- ・ 食事体験をしたときに、介護する方の変容と食べる側の両方を体験して、簡単に食べさせていた事を反省した。
- ・ 体位・姿勢変換は、正しく行わないと骨を悪くしてしまったりすると知った。正しく行うことが出来るようにしたい。また、褥瘡は作らないことも学べた。
- ・ 車いすの介助をしたとき、キャスターを浮かすのが大変だったし、段差から降りるときは勢いよく車いすが落ちてしまい、操作が難しかった。介護する側と、してもら側が積極的にコミュニケーションをとって、不安を取り除きながら介護しないといけないと思った。
- ・ 実際に衣類の着脱をしてみて、前開きの服に比べてかぶりの服は着替えさせるのが難しかった。スムーズに着せられるよう、努力したい。
- ・ 訪問介護で、短い時間で清掃や調理をするには、手際良く行動しないと時間内に作業が終わらないので、できるようにしたい。また、利用者様とコミュニケーションがとれるように話題作りを出来るようにしたい。
- ・ 実際にやった移乗の仕方、食事の介助は練習と

違ってとても大変だった。特に移乗の時に苦戦してしまい、不快な思いをさせてしまった。

- ・入浴介助を手伝わせてもらった。戸惑いながらも服を着せてあげることが出来た。いかに不快な気持ちをさせないかが難しく、ちゃんと出来ていたかが不安だった。
- ・最初はコミュニケーションをとるといっても、少し話すだけで終わっていたが、コミュニケーションをとることの大切さがわかった。
- ・在宅サービスを行い、様々な方と接することができ、ホームヘルパーの仕事の大切さを理解することが出来た。利用者の方を幸せにするようなサービスを心掛けたい。
- ・利用者様の気持ちや状態に合わせて傾聴することが一番大変でもあり、大切だと感じた。

#### Ⅳ 終わりに

この研修を終えて、学生たちは、最初は資格取得のために気軽に受けたものが多かった。しかし、農作物や食品を相手にするのではなく、生身の高齢者の方たちへのヘルプ作業がいかに大変か、また、その気の使い方がいかに難しいかも実習を通して学んだようである。

自然や植物や食品を相手にする方が気持ちは楽だったと話をしていた。しかし、これから農村で生活していく彼らにとって、人との交わりをヘルプ作業を通じて学んだことは、彼らの成長の一助となった。農村生活での有意な人材の育成を今後も続けたいと思っている。